

# チェコの音楽教育

声楽家

## 出井則太郎

「チェコ人と言えは音楽家」：

こんなフレーズが昔からヨーロッパにはある。「ヨーロッパの音楽院」とも呼ばれていたボヘミアとモラヴィア(現在のチェコ)。スメタナ、ドヴォルジャーク、ヤナーチェク、マルティヌーリだけではなく、この国のたくさんの作曲家、演奏家が西洋音楽の歴史の中で常に重要な役割を果たして来た。

隣国に国土を、時に母国語さえ奪われたチェコ人。政治的、経済的理由で常に大國の陰に埋もれる形で存在しているのは事実だが、今なお音楽界に与えている影響は大きい。

今回は、そんなチェコの現在の音楽教育と音楽教師、そして音楽の現場をリアルにお伝えしたい。

### 義務教育での音楽

イタリアのように義務教育の科目に音楽がない国もヨーロッパにはあるが、チェコには小学校から音楽の時間がある。授業は歌が基本。日本のように鍵盤ハーモニカ、ハーモニカ、リコーダー等を授業のために購入することはない。

チェコの教育機関で使われる歌集 *Tá pískáka* (ヤー・ピースニチカ・わたしお歌ちゃん) は三種類(赤・緑・黄色)あり、六歳から十五歳までこの本を使う。まず民謡や童謡から始まり、上級生用(黄色)になると、いわゆる世界の名曲やポップスも加わる。基本として、歌詞は訳詞なので、ビートルズやカンツォーネもチェコ語で歌われる。面白いのは、ビートル大國

チェコであり、東のモラヴィア地方はワインの名産地。どうしても民謡に酒の歌が出てしまうのだが、そういった酒盛の歌、恋の歌は上級生用の歌集に集中している。さすがに六歳の子どもに酒の歌は教えられないだろう。

そして歴史やフォークミュージックに興味がある方には驚きの光景になるのだが、一九八九年の革命以前には反体制、政治犯として扱われていた歌手の歌が多数、この歌集に取り入れられている(カレル・クリル、ヤロミール・ノハヴィツァといったいまだに人気の落ちない伝説的ミュージシャン)。ビロード革命でもそうだったように、歌と音楽で団結し、その歴史を切り開いてきたチェコの歴史は、新しい音楽教材にも脈々と受け継がれている。

話はそれるが、古楽が盛んなチェコでは日本製のリコーダーが人気だ。ヤマハや、トヤマ楽器のアウロスをよく見かける。ドイツ製の木製リコーダーは音質がよいが、値段が高い上に管理が難しく、すぐにひびが入ってしまう音程も

変わってしまう。ヨーロッパ生産の安いプラスチック製リコーダーは音程が悪く、玩具程度。それに對して日本製のリコーダーは音程がしっかりしていて、しかもプラスチックだから乾燥で破れることもない。大人気である。

リコーダーは、私が小学生の頃は全員が持っていて、誰でも吹けてしまうため特別な魅力を感じなかったが、チェコ(ヨーロッパ)では立派な楽器。これには驚いたが、逆にチェコ人に「日本人の子どもは誰でも義務教育で習うから吹けるし、持っている」と言うのと、驚かれた。

リコーダー・アンサンブルが結婚式の音楽隊として演奏したり、古城の祭りや、各地の音楽祭で名演を聴かせてくれる。この他、ヴァイオリンやコントラバスはチェコの民謡には欠かせない楽器で、日本では憧れの楽器として見えるヴァイオリンも、いたるところでありふれた家財道具のように目にする。

### 音楽学校と演奏家

他のヨーロッパの国同様、午前

中で授業の終わるチェコでは午後  
の時間を利用して、小学校入学の  
年(六歳)から初等芸術学校に入学  
できる。これは公立の学校が大学  
まで無料のチェコには珍しく、有  
料。とはいえ年額が日本円で六万  
円程度。ピアノやヴァイオリン、  
バレエまで習える。教育機関に所  
属せずにプライベートで教える先  
生は稀で、習う生徒も基本はこう  
いった音楽学校に集まる。

この学校は六歳から十五歳のコ  
ースト、十六歳からの二コースに  
分かれている。

十六歳からはコンセルヴァトワ  
ールに入学できるので、演奏家志  
望者、音楽家志望者はそちらに移  
る。もちろんコンセルヴァトワー  
ルには受験がある。

さらに上を目指す演奏家は音楽  
アカデミーを目指す、この辺り  
から人材・才能の海外流出が始ま  
るのは否定できない。原因はチェ  
コという国が抱える経済的な問題  
が大きい。隣国、オーストリアや  
ドイツでオーケストラや歌劇場に  
所属する方が安定した収入を得ら  
れるため、弦楽器をはじめ、歌手  
も才能のある人材が海外に流出し

ている。オーストリア・ウィーン  
の交響楽団に所属するヴァイオリ  
ニストと話した時に「大好きな国  
だし、老後は母国で暮らしたい。  
でも、チェコとオーストリアの収  
入の差を考えたら、今は帰れない」  
と、淡々と言われたのが、チェコ  
を愛する私には少し寂しかった。

しかし、社会主義体制下での教  
育は、すべての国民が平等に享受  
できるものとして考えられていた  
ことと、知的労働は肉体労働以下  
とされていたことから、事実、教  
職や教師の収入は今も低く、大学  
の教職者の年収も今は国民の平均  
年収以下である。都市には必ずオ  
ーケストラや歌劇場があるし、日  
本よりずっと音楽家、演奏家の雇  
用や福利厚生は整っているが給与  
的には高くなく、音楽家は理想的  
の職業ではない。子どもが憧れる職  
業は俳優やモデルが一位。いわゆ  
るポップスのミュージシャンも含  
め、子どもが音楽家に憧れること  
も、親が子どもに望むこともない  
という。

しかし人材流出や、給与・経済  
的な問題とは関係なく、チェコの

街には音楽が溢れている。どの街  
の市庁舎前の広場でも、ことある  
ごとに音楽イベントが開かれる  
し、居酒屋や、街の人が集まるレ  
ストランではギターを奏でる人の  
周りでたくさんの人が歌う光景も  
珍しくない。それは数百年前の民  
謡から、民主化革命のシンボルで  
あつた歌、最近の流行歌までさま  
ざまだが、歌い、そして奏でるチ  
ェコ人の生活は変わらない。

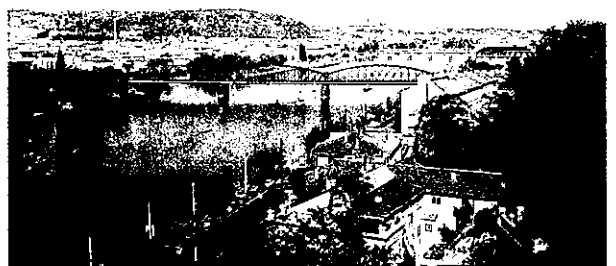
教育以前に、生活の音楽があり、  
収入や経済問題にかかわらず奏で  
歌う暮らしがある。

私は、チェコ人の生活の音楽の  
中にスメタナやドヴォルジャーク、  
ヤナーチェク、マルティヌー、  
マーラーを育てたこの国の音楽教  
育の原点と心を感じる。

一九八九年のビロード革命、そ  
して民主化。その四年後の一九九  
三年一月にチェコスロヴァキアは  
解体。チェコ共和国となつて今年  
で十七年。社会主義から資本主義  
への転換、そしてEU加盟、と考  
え方も生活も大きな変化を乗り越  
えたチェコに、今も昔も変わらな  
い音楽文化創造の原点が見てとれ  
る。



高学年の教科書 Já, písnička



スメタナ、ドヴォルジャークが眠るヴィシエフラドから見たヴァルタヴァ川(モルダウ)